慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「考訂やまと詞」
Sub Title	"Yamato Kotoba" bibliographic study of the vocabulary of old poetic Japanese words
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1994
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.65, (1994. 3) ,p.25- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	檜谷昭彦, 佐藤一郎両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00650001-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「考訂やまと詞」

関場　武

今を去ること三十年前、檜谷先生には国文学演習で近松の「曽根崎心中」をお習いした。たしか初めて三田で国文学専攻の授業を持たれた時で、小生も先生もずっと若かった。毎週毎週、近松の作品に関するレポートの提出、毎時間、何回か繰り返される質問の絨緞爆撃は辛かったが、調べることの大切さと面白さを教えて頂いた。そして何より有難いことに、勉強することに対し弾みをつけて下さったのである。今回のレポートは、先生の還暦記念論文集・近世篇（昭63・12）に提出申し上げた「意見早引大善節用」に次ぐものである。諸般の事情からまた手近の資料を使ってのものとなってしまったが、何卒御寛恕の程を。

一

近世初頭から後期に至るまで版を重ねて行った小冊子に「大和言葉」、「大和詞大成」等と題するものがある。同書は

あきつしまとハ　につほんの名なり、日のもととは　同わかてうの事也、もろこしとは　からこくをいふ……ゆふつけとりとハ　あかぬわかれかなしき事、しかふすのべとは　きみとねハやとの事也、たまくしけとハ　あかつき

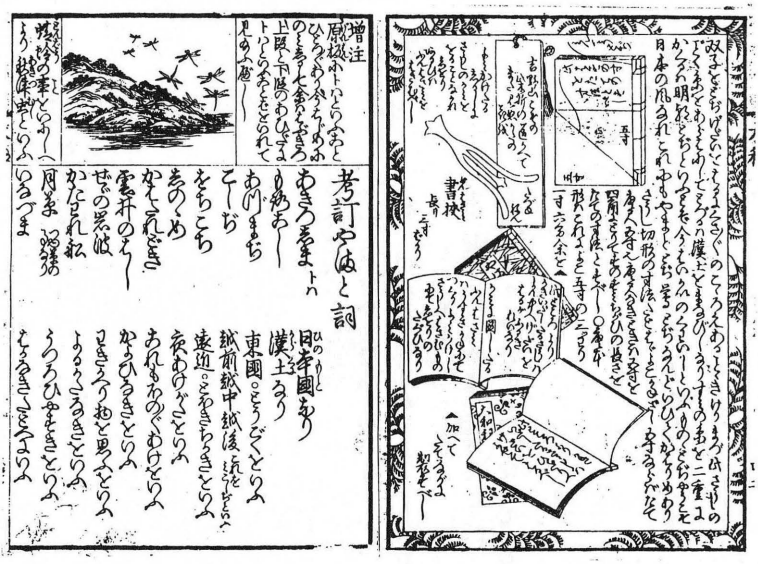

図１　「考訂やまと詞」巻頭（２ウ・３オ）

の事也（慶応義塾図書館蔵・無刊記本）

一、いまち月とハ　十八夜をいふ　一、いもせとハ　ふうふをいふ　一、いななきとハ　いなかをいふ……一、すりはり山とハ　かなわぬ心をいふ也　一、すみかまとハ　こがるゝをいふ　一、すゝしき道とハ　こくらくせかいを云（延宝九年八月松會版）

等と、あるものは任意に、あるものはイロハ分けに、また部類別に「和哥誹諧の便となる艶詞」を集め解説したもの（享保十一年菱屋版後印本・巻末広告）で、「和歌連誹の初学の一助と成し、源氏・伊勢、名にしあふ物語の哥書を見んに甚さとし安」（同・明治十七年求板本見返し）きものとして賣られたものであった。見出し語数は本によって異なるが、少ないもので一二七語、多いもので八一二語。二七七、八のものも通行する。ともあれ、本書は、簡便な歌語・連俳用語辞典、雅語辞典として使われたもののようで、末に「恋の詞付合」（五二項）や「世話字尽（世話字撰集）」（三四八字）を付して刊行されたり、往来物の頭書・付録に収

められることも多く、残存する伝本は少なくない。諸本については、既に加藤定彦氏の報告（近世文学資料類従・古俳諧編47〈昭51・9〉）や真下三郎氏の論（橋本博士還暦記念「国語学論集」等所収）があるが、未だ整理しきれぬ点が多い。今回ここに翻刻・紹介するのは、貞享元（一六八四）年の原版に、弄花翁が考訂を加え、柳亭種彦が閲し序を与え、天保二辛卯（一八三一）年孟春に出版したものである。但し種彦の序は天保壬辰（三年）元旦となっており、刊行時期については疑問も残る。まず底本にした丹澤文庫本の書型の概要を記す。

中本一冊。鶯緑色無地表紙。竪一八・二、横一二・四糎。

題簽　表紙左肩。下方に鶴喜の舞鶴の商標のある短冊形白紙、飾り枠内に「大和詞重訂」と大字で記す。竪一三・八、横三・九糎。

前見返し　重郭付白紙。右上に飾り檜扇があり下っている房の間に「大和詞（やまとことば）」と出し、下方に「仙鶴堂梓」と右から記す。また、左上に「辛卯孟春再板／柳亭閲並序／弄花翁考訂とあり、左下に島台の上に立つ鶴の姿を描く。ここで言う「再板」とは、刊記にあるように貞享元年の原板に対する天保二年辛卯孟春の再板という意味であろう。

序題　考訂大和詞序」。末に「天保壬辰元旦柳亭種彦吉書」とアリ。天保壬辰は三年のことであり、刊記や前見返しの年記より一年後のものである。

内題　考訂やまと詞」。尾題　大和詞 卆」。

刊記　終丁オ本文末左方に「原板 貞享元年子三月吉日／再刻天保二年辛卯孟春／書林並地本錦繪問丸東都通油町 仙崔堂 鶴屋喜右衛門板」

版心　白口。上方に界線を置きその下に「大和」と書名を記し、下部に丁付。丁付　ロノ一～二、壱～十一。終丁にはナシ。丁数　一三丁半。（前見返し）＋（序・前付）二＋（本文）一一丁半。終丁は後見返しに貼付。

図２　享保11年版巻頭（７ウ・８オ）

行数　（本文）毎半葉一四行、（序）九行で、他は不等。字数　不等。振り仮名、濁点あり。

挿画　本文一ウ・二オに見開き図がある他、前付、頭書一〇ヶ所に挿し絵あり。絵師は、本文一ウ見開き図右下方に「一勇斎／國芳画」とある通り歌川國芳。

匡郭　本文部分は四周単辺、竪一五・三五、横一〇・五糎。本文一オ、二ウ～一〇オには頭書欄アリ。また、序、前付ウは飾り枠付、前付オは子持ち枠付。

備考　原装なれど手ズレ等少しあり。

二

刊記にあるように、本書は貞享元年版を基にし評注を加えたものである。集中、「原板（げんばん）に」とある所が一ヶ所、「原板に」が七ヶ所、「元板に」と「前板に」が各一、「前板（ぜんばん）に」云々が一ヶ所ある。そして「原板にかくあり」（一七九・つま木　頭書　〈数字は私に付した項目番号。以下同〉）、「元板此哥を引り」（二一〇・のきば

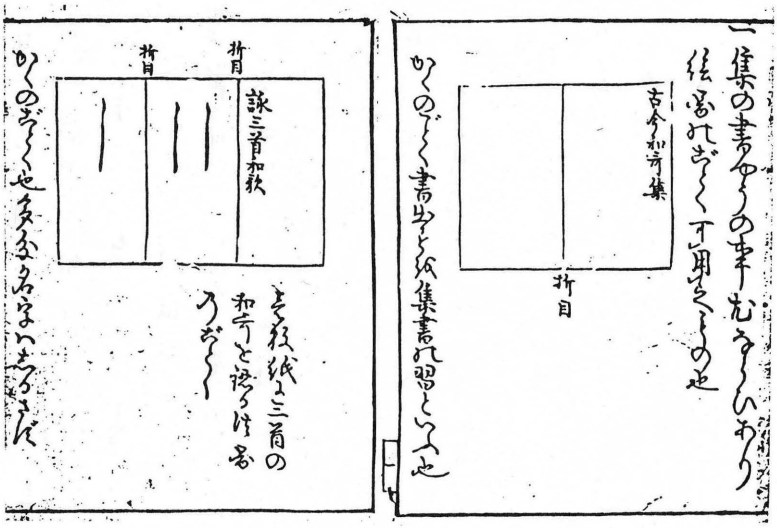

図３　享保11年版前付け（３ウ・４オ）

の草　頭書）といった具合に、たゞ原版を引いている所と、

原板にすみよしの浦をいふとあるハこゝろえがたきことながら、私にあらためず（一四五・わだつみ　頭書）

原板に此哥を引く、よそに見てすぐるをいふとハ、あまりなるあやまりゆゑ、あらたむ（一五三・みねの白雲　同）

前板にいな舟とハしげき思ひをいふとあり、舟ののぼりくだりしげきたとへか、不審（二〇三・いなぶね　同）

等と批判したり不審を投げかけている箇所がある。項目数は二二六。それに対し約四分の一の五五項に注を付している。すなわち、「あきつしまトハ　日本國なり、もろこし　漢土なり、あづまぢ東國。とうごくをいふ」～「すりばり山　かなハぬ事をいふ、ふじのけぶり　たえぬおもひをいふ、まつふく風　かしましきをいふ」までの二一四項が前にあり、次いで

以下ハ前板に見えて、ことに不審の条〻なり、〇マルの目安をつけたるハ翁が増注と見給ふべし

として、「うつゝこゝろ」、「かげろふ」、「はまちどり」～「さをしか」、「ますらを」、「おにのしこ草」の一二項分につき、各々批注

を加えている。本書の原板となった貞享版は未見であるが、その元版は、イロハ順ではなく、寛永頃かと言われる古活字版や無刊記整板本に始まる任意に項目を配して行く系統の本であることは間違いない。但しこの「考訂やまと詞」が、それを忠実に追ったものであるかは不明である。貞享版を目睹するまで後考を俟ちたい。

ところで、本書の前付には、冊子の綴じ方や書き出し様、栞や書挟について図入りで説明している個所がある。色紙・短冊の書き様は元禄以降の節用集の前付や往来物の付録等にもよく見られるところ。特筆するには値しないかもしれぬが、この「考訂やまと詞」のそれは、享保十一（一七二六）年八月に永原屋から刊行されたイロハ分けの大和言葉集「増補大和言葉」の前付に示唆を受けている可能性がある。同書は後に書型を示すように、明治十七（一八八四）年に至るまで何回か版刷を重ねて行くのであるが、その前付に、集の書やうの事、懐紙・短冊の書様の事が図入りで三丁に亙って記され、末に「右哥道之式ハ、ある人の書をかれしを、今世にちりばむのみ欤／于時／享保十二丁未年正月吉日」と留めているのが特色である。本書は或いはそれを享けているかもしれないのである。大和言葉の集に於ける色紙短冊寸法に関する記事は、折本で部門分けという特異な形態を有つ宝暦二（一七五二）年版の「増補大和言葉」にもあり、本書の専売特許ではない。しかし、流布した度合からして本書のそれがこの「考訂やまと詞」の、繪師一勇斎国芳をも含めた関係者の眼にとまった可能性は大きい。これ以上徒らに推論を積み重ねることは避け、これも後考を俟つこととしたい。（図版1および3参照）因に、その享保十一年八月版系統の諸本をあげると、次の如くである。

【A】小本一冊。題簽　やまと詞大成」。序題　やまと詞之序（久樂山人書）」。内題　増補大和言葉」。付録は各々「恋の詞　付合」、「世話字尽」と題す。刊記　終丁ウ「世話字尽」末左方に「享保十一丙午年八月吉日校正／京高辻通柳馬場東入ル町永原屋孫兵衛板」とあり。また、後見返し匡郭内に、上に大きく「古筆類」と右横書きに出し、界

線を置いて下に「現銀　安賣／掛物類／色紙短冊／諸額類／唐筆類／書本類」と記し、更に界線を置いて下に「品々有」と右から記す。版心　白口、下方に丁付のみ。丁付　（序）序一～二、（前付）丁付は各丁裏ノド側匡郭左下小枠内、一～五。（本文）▲二～四十八、四十九五十、五十一～六十五終。丁数　全七〇丁。（序）二＋（前付）五＋（本文）六三丁。匡郭　三周単辺。版心側にはナシ。行数　本文は一〇行。

備考　冒頭久樂山人の序は次の通り。

それ哥ハ天地いまだひらけざる時より出来しとかや、されば、青きをふみてよろこぶ野邊の鶯、黄ばみ落るをおしむ谷の鮴もち、いづれか敷嶌の道しるべならざらん、千早振神代の俳優ハ、人の世にをよんで俳諧につらね、さかんにたのしみもてあそべり、是を好めるうなひ子のたよりともなりねかしと、中村氏冨丸が心をよする波の間に〳〵ひろい集めをきし玉を、かいやり捨んも此道の本意にあらざれバとて、あづさにちりばめんとするに、なをつくば山のしげきことの葉なれば、此面彼面にしりがたく、岩瀬の森のいはれぬたくひハ、もりながら編なして、やまとこと葉と名づく、このおもむきを、やつかれにいさゝか述よといふに、いなみがたくて、拙き硯をならしのをかの露ばかり筆をくハふるものならし

【Bイ】刊記の書肆名部分が「寺町通松原上ル町　菱屋治兵衛板」となっているもの。「校正」の二字ナシ。刷りAより劣る。【Bロ】Bイ本の巻末に「八木氏藏板書略目録　京寺町通松原上ル町北ヨリ／書林　菱屋治兵衛」と題する広告が七丁分付いているもの（末に「尾州賣所　名古屋本町九丁目ひしや久兵衛」とアリ）。【C】B本の再刻。刊記　終丁ウに「享保十一丙午年八月吉日元板／寛政四壬子年菊月吉日再刻／書林　京都寺町通松原上ル町西側北より菱屋治兵衛板」と記す。終丁ウを奥付（刊記）部分に仕立てたため、付録の「世話字尽」は半丁分少なく、世風俗、満遍～強直、屑計の三二

四字目までで終っている。亀田文庫本は巻末に菱屋治兵衛の「八木氏藏板書略目録」を付す。【Dイ】C本の書肆の部分が「書林　順慶町心斎橋通り柏原屋清右衛門」となっているもの。Cの求版。【Dロ】Dイ本の後見返し匡郭内に「和漢書籍精選發兌／大野木寶文堂（印）／大阪書肆　心齋橋南エ壹丁目秋田屋市兵衛」とあるもの。すなわち秋田屋発賣本である。

【E】明治十七年求版本。題簽　燕脂色刷り白紙。「増補大和詞大成　上」、「増補やまと言葉　下」。上巻前見返し紅色地紙。子持ち枠付匡郭内を左右の欄が大きくなるようにして竪に三ツ割にし、右に松・竹・梅の絵、真中に「増補大和詞大成」と書名を出し、左の欄に

此書ハ新に増補し、悉誤りを正し、引哥を補て和歌連誹の初学の一助と成し、源氏・伊勢名にしあふ物語の哥書を見んに甚さとし安く、猶恋の詞付合并世話字盡を追加して、世に弘る者ならん

と内容案内を記す。また上欄外に「明治十七年五月」と右横書きに年記を記す。内題　（上）増補大和言葉」、（下）増補大和詞巻之下序図」。これは享保版の前付け五丁目に在った絵図を此処に移動させ題を付け加えたものである。尾題　大和詞巻之上終」（下巻にはナシ）。刊記　下巻終丁ウ匡郭内に「享保十一丙午年八月吉日元版／明治十七甲申年五月十九日求版御届／東京京橋區南傳馬町壱丁目十八番地／書肆　松山堂　藤井利八板（陰刻印「岑山／堂」）。右下スミに「定價金三拾錢」の小型長方朱印を捺す。版心　序および前付けには何もナシ。丁付　〈上〉（序）版心に在ったものを、前付けと同じ様に各丁裏ノド側左下スミ匡郭利用の小枠内に移し、ロノ一、ロノ二とする。（前付け）一～三。四は削る。また前に記した如く、前付けの五丁目を下巻巻頭に移し、丁付は削っている。（本文）▲二～三十三。〈下〉初丁にはナシ。（本文）▲三十四～四十八、四十九五十、五十一～六十五終。丁数　〈上〉三八丁〈下〉三二丁。

備考　D本の求板。下巻D本の本文丁付三十三ウ最終行は○に「江ゑ」の陰刻のイロハ分け標目のみであるが、本

書はそれを下巻本文冒頭に移している。そしてそれに伴い、三十四オ一行目の「一えにし」の四字を改刻してや、下方にずらしてある。

【翻刻】

一、底本に忠実ならんことを期したが、私に改行、句切りを施した。○点は原本のマヽである。
一、頭書部分は二字下げとし、各丁表・裏の末にまとめて記した。頭書で言及している項目は、右肩に＊印を付して他と区別した。
一、底本には丹澤文庫本を使用した。

考訂大和詞序

舊本大和詞ハ何人の作なる事を知らず、今是を考訂するハ友人弄花翁なり、翁予にいへらく、此冊子の不審ことを削り漫に詞を添るときハ、新に書を作るに似たり、如何せんと嘆ず、予曰、原来童蒙の玩弄なり、皇國学びの瘤を出し、たとはゞ虫の部を正しかはびらこと記しなバ、なま長くして打聞わろし、蜻蛉ハ稲妻と對句のやうにて虫めかず、是が往古の機織なりと博識ぶりに綴らんより、てふちよ・とんぼやきりぐ〳〵すと、只一口にいふこそよけれ、ことに此書、彫なりて百有余年を過たれバ、俗につたへしえしれぬ歌も」（一オ）又考証とするに足りと、いけざうさなく答へけれバ、翁惘れて座を退き、持てうまれた癇積にて、えしれた歌の誤りハそこらこゝらをあらためしが、少しくおのれが意見も用ひ、不審ながらもおほよそに聞ゆる詞ハ、それなりけり、いよ〳〵聞えぬ事のみ抄出、巻尾に連てぼつ〳〵と何か注釈を書れたれバ、まん更捨べき書にもあらず、是を童子にあたへなバ、竹馬芥鶏輪廻し、めんてう打の戯れより、少しハ益を得る事あらんと、まじめに書べき序文さへ、つひ筆びやうし口拍子、今朝の雑煮の三抔機嫌、ごめんゆへたわい〳〵

天保壬辰元旦　柳亭種彦吉書」（一ウ）

日本武尊、日の高みの国より、常陸をすぎ甲斐にいたり、酒折の宮にましまし、とき

にひばりつくばをすぎていくよかねつる

とうたひて、さぶらふ人にとはせ給ひしに、おんこたへをせざりけれバ、火をともしてはんべる翁ぞそのすゑを申ける

かゞなへてよにハこゝのよひにハとをかを

○此御哥、古事記にハ。ばり。日本紀にハ。まり。とあり、ひたちのにひばりつくばといふ地の名を、手まりのことによそへ、にひまりをつくといひかけ、いくよかと、かずの字をしもにおきて、つくばをすぎていく夜か寐たるととひ給ひしなり、おきなも、手まりつくかずの縁語をとりて御こたへまうしゝなり、かゞなへてハかぞへてなり、かぞへてみれバ、夜ハ九夜日ハ十日なりといへるなり、手まりつくに、ひふみよといへるハ、ふるき世よりのことなるべしと、荷田のうしの説なり」（二一オ）

双子をとぢ、げだいをはるに、くさ〴〵のこゝろえあることゝきけり、まづ此さうしのごとく、糸をあらはにしてとづるハ、漢土をまなびしなり、すみの糸を二重にかくるハ明朝とぢといふとぞ、今はいかいのくわいしといふものゝとぢやうこそ日本の風なれ、これにもやまととぢ・鴬とぢなんどいひて、かはりめあり

さうし切形の寸法、たとはゞ、よこかねざし五寸ならバたて唐尺五寸也、唐尺なきときハ、五寸を四角にとりて、すのすみちがひの長さをたての寸法とすべし、○唐本形ハこれによこ五寸の三ッわり一寸六分余を加へて、たてながに製すべし

（図）此ところ（一丁ウラ）よりかきいだしたるさうしハ、まん中へげだいをはるがふるきれいなり　此ところ（一丁オモテ）よりかきいだしたるさうしハ、げだいをひだりへよせてはるべし

（図）みんてうとぢ　此はすの寸をたての寸法とすべし

よみかけたるしるしに、さうしのかみををることなかれ、しをりあるひハふんはさみをはさむべし（図・しをり）吉野山こその柴折の道かへて　また見ぬかたの花をたづねん（図・ふんはさみ）書挟（ふんはさみ）長サ三寸ばかり、かみに図したるふんはさみハ、うすきかねにてつくり、よみかけしさうしへはさむものにて、しをりのたぐひなり」（ニウ）

考訂やまと詞

＊あきつしまトハ　日本國（ひのもと）なり　もろこし　漢土（からくに）なり　あづまぢ　東國〇とうごくをいふ　こしぢ　越前・越中・越後　これをみこしぢといふ　をちこち　遠近〇とほきちかきをいふ　しのゝめ　夜あけがたをいふ　かはたれどき　これもほの〳〵あけをいふ　雲井のはし　かよひなきをいふ　ぜゞの岩波わきかへり物を思ふをいふ　かたわれ船　よるかたなきをいふ　月草　つゆ草の事なり、うつろひやすきをいふ　いなづま　はかなきたとへにいふ

（頭書）増注　原板（げんはん）にトハといふことひとつ〳〵あり、今はじめにのみしるして余ハはぶきつ、上段と下段のあひだにトハいふことばをいれて見給ふべし

〈図〉蜻蛉（とんぼう）の事を、いにしへより秋津虫（あきつむし）といふ」（三オ）

（図　三ウ・四オ）（一勇斎國芳画）

日本の國の形、かの虫に似たるゆゑに、あきつ嶋といふとぞ

*かはたけトハ　うきふししげきをいふ。筈。と書り　身をしる雨　なみだをいふ　うづみ火　したにくゆるおもひにたとへいふ　あかねさす　日のいづるをいふ日といふべき枕詞なり　*人のため　いつはりをいふ　はながつみ　まこもの事なり　はながたみ　花をつむ籠をいふ　*くずの風又くずのうらばうらみをいふ　たまのを　いのちをいふ　あしびき　山といふ*枕詞也まくらことばのこと、かしら書にあり　玉がしは　木にあらず、石の事なり　なはしろ水　ひくかたおほきをいふ　おほぬさ大麻　ひくてあまたの事をいふ　せな　男の事をいふ」（四ウ）　又あにの事をも兄人などいふ

（頭書）○川竹ハ節のしげき竹なり、それに憂ふししげきをたとへていふ也

○偽といふ字をわくれバイの為なり

○葛の葉ハ風ふけバ裏を見するもの也、それを恨みにたとへていふなり

○枕詞といふハ、そのものをいはんとてそれの上におく詞なり、山といはんとてうへにあしびきとおくたぐひ、かずおほくあり、すゑ〳〵までそのこゝろにて見給ふべし

あきの田　ほにいづる思ひをいふ　一トむらずゝき　是もほにいづる事なり　ほにいづる　思ひの色のあらはるゝをいふ　ふゆの田　たのみなきをいふ　*れんりのえだ　ふかきちぎりをいふ　ゆく水　かへらぬ事をいふ　もゝしき　内裡をいふ　谷のこほり　とけやらぬ事をいふ　はなたちばな　むかしをしのぶ事をいふ　すがのね　山菅の根なり、長きたとへにいふ　よこぐも　日の出んとするときたなびく雲をいふ

をみなへし　人のくねるにたとへいふ　　*あすか川　かはりやすき事にたとふ

（頭書）○天にあらバ比翼の鳥地にあらば連理の枝と長恨哥に見えたるより、ふかきちぎりの事とす、又連る枝といふハ兄弟の夏なり、音にて連枝とも〈図〉

○よの中を何にたとへんあすか川　きのふのふちハけふのせとなる」（五オ）

いぎたなしトハ　俗にねぼうといふほどの事なり　　ぬれぎぬ　なき名のたつをいふ　　もち月　十五日の月をいふ　　いざよひ　十六日の月　　たちまち月　十七日の月　　ゐまち月　十八日の月　　ふしまち月　十九日の月八雲にハふし待も廿日とあり　　ねまち月　廿日の月　　*いもがりゆく　女のもとへかよふをいふ　　*わがせこ　わが夫の夏をいふくはしくハかしらがきにあり　　しづ心なき　しづかなる心なきをいふ　　おきこぐふね　とまりさだめぬをいふ

をぐるま小車也　めぐりあはんといふたとへにいふ　　しきたへ　枕といふべきまくらことばなり

（頭書）○いもとハ女の事をいふ、許とハもとといふ夏なり　○わがせこ、わがをつとといふ事なり。せ。とばかりもいへり、ゆゑにふうふのことをいもせといへり

〈図　衣通姫〉○わがせこがくべきよひなりさゝがにの　くものふるまひかねてしるしも　こゝにハさゝがにのくもとかさねていへども、たゞさゝがにとばかりいひてもくもの事也」（五ウ）

*みやびたる　みやこめきてうるはしき事　　*ひなびたる　ゐなかめきてつたなき事　　みとのまくばひ　女男まじはるをいふ　工合のよきといふ詞も是より出たりとぞ　　みつわぐむ　年おいてこしかゞみたるをいふ　　しまつ

図4　「考訂やまと詞」前見返し・序

鳥　鵜の叟なり　　ひもかゞみ　氷の事なり　　けぶ*り草　たばこの事なり　　みづぐき　筆の事。水ぐきのあと。手跡也　　ひぢがきあめ（マヽ）　にはかにふりくる小雨をいふ　　日ぐらし　朝より夕ぐれまでをいふ　　ひめもす　終日（しゅうじつ）の事なり　　すゑつむ*花　べにの花をいふすゞしき道　ごくらくの事なり

（頭書）○鄙（ひな）とハゐなかの事なり、ひなことばといふハゐなか詞なり、さて、ひなび・みやびのひの字ハ風（ふ）俗（ぞく）といふ事なり、ひなびハゐなかぶり、みやびハ都（みやこ）ぶりなり、うつくしきことをみやびやかなどいふ、宮（みや）の字なりともいふ

〈図〉あまのたくものならねどもけふり草　人のたちゐのしほとこそなれ

○紅花（こうくわ）ハさきいづると、その花のすゑをつみてべにをしぼるものなり」（六オ）

*てふトハ　といふ。といふ事なり、恋すてふハ。恋するとい

ふ。干てふハ。ほすといふ。といふ事也　しのぶ　人目をしのぶハ人にかくるゝ也、人をしのぶ。むかしをしのぶ。などいふハ、こひしく思ふ事也　さかゆく　栄るなり　こゝろなぐさ　心なぐさめなり　*たゆたふ　舟などのうごきゆるぐ事也　たつき　便なり　すだく　多く集る事をいふ　わくらは　希。たまさか。をいふいさゝめ　かりそめの事、卒爾の意也　しばなく　鳥などのしば〳〵鳴をいふ　ことにいでゝ　詞にいでゝなり　とはに　常にといふ事

（頭書）○こひすてふわが名ハまだきたちにけり　人しれずこそおもひそめしか　○春すきて夏きにけらし白たへの　衣ほすてふあまのかく山　○てふといふ詞、ふるくハちふともいへり、今ゐなか詞に、なんだちふといふハ、なにといふことゝとふことにて、ふるき詞なり、笑ふべからず

○たゆたふハ、ふねなどのゆるぎうごくことなれど、はしるにハあらず、たゞおなじところにありてゆるぐをいふゆゑに、人のそのところへゆかんとして、ゆきやらず、ためらひをるをも、たゆたふといへり」（六ウ）

とことは　これも常の事、万葉に常不止と書り　*みどりのはやし　盗人の事をいふ　*しらなみ　かみにおなじ、盗人の事也　なげ　なほざりなり、なげのなさけトハ、なほざりにてしんじつならざるなさけ也　つかのま　すこしの間をいふ、今。時の間といふにおなじ、草をかりてつかぬるほどの間也　つかぬる又たがねる　たばねるといふ事なり　さきくさ　檜。ひの木の叉なり　うつろふ　移る事なり、花のうつろふハさかりのすぐる事なり　ひさに　久しきをいふ。するひさに。ハ。するひさしく。いくひさにハ。いく久しく。也　はらから　兄弟の叉なり

（頭書）○漢土にて盗賊の事を緑林白波といひし古叉あり、それを訓じて、みどりのはやしとも、しらなみともいへるなり、風ふかばおきつしらなみたつた山　夜はにや君がひとりこゆらん〈図〉」（七オ）

*たゞちトハ　直に。といふ事　　そとも　家の外をいふ　　*よすが　たよりなり　　あふさきるさ　とするもかくするも。といふ事也　　心あて　おしはかる。すゐりやう。の叉なり　　*あさはか　浅きをいふ　*いふ事とぞ　あさくはかなきと　あやなし　無益といふ事なり　　*つて　傳るなり　　いやまし　いよ〳〵まさるをいふ　　いまし　今といふ事也　　せみのはごろも　夏きるきぬのうすきをいふ　　てもたゆく　手のだるきをいふ　　琴ひき草　松のこと也又千代見ぐさ　　風見草　柳のことなり

（頭書）○たゞちにゆくハすぐにゆくなり。たゞちにきたるハすぐにくるなり

○これをよすがに。ハ。これをたよりになり、よすがとして。ハ。たよりとしてなり

○人をあさはかといふは、ちゑのあさきなり、あさはかなるすまひなどいふハ、おくふかからぬ家なり

○人にいひやりてつたふることばを言傳といふにて知るべし

○今をいましといふ。し。ハ、助字とて、そへたるのみにて意ハなし、「あふことのたえてしなくバ」、あふことのたえてなくバなり、「たびをしぞおもふ、「ふねをしぞおもふ」、たびをおもふ。ふねをおもふといふことにて。し。の字にハこゝろなし」（七ウ）

ゆめ見草　さくらのことなり　　ふかみ草又廿日草　牡丹のことなり　　もゝちどり　鶯又春いろ〳〵の鳥の鳴を

いふ　くだかけ　鶏をいふ　ましら　猿なり、又ましこトモましトバかりもいふ　なよし　鰡ぼらといふ魚也、又。くちめトモいふとぞ　かはびらこ　蝶てふをいふ　かはらよもぎ　菊をいふ　*うばたま　くらきなどいふ枕詞、頭書にくはし　あさがほ　日かげをまたぬなど、はなかきことにいふ　あはび　かたおもひをいふ　たたう紙　畳紙とかく、はながみをいふ　そほづ　田にある鳥おどしをいふ　すべなき　詮方なき也、俗にいふしかたがなき

（頭書）〈図〉烏羽玉、又ぬば玉といふもおなじ。黒き。やみ。夜。などいふ枕詞なり、「うば玉のわが黒かみ」と詠しハ、我といふ字をへだてゝ黒かみとうけたる也、「ぬば玉のゆめ」といふハ、夜のゆめといふべき夜の字をはぶきたる也」（八オ）

すべらきトハ　皇王みかどの御事をまうす　ひつきのみこ　立太子をまうす　ひぢりこ　泥の事をいふ　うはを　後の夫をいふ　うはなり　後妻をいふ　目しひ　めの見えざるをいふ　耳しひ　みゝのきこえざるをいふ　*みかまぎ　たき木をいふ　*みとしろをだ　神の田をいふ　*めづる　愛する事、又感ずるをもいふ　さゝらえをとこ　月をいふ　さえだ　木にもあれ草にもあれ、小き枝をいふ　はなしろむ　顔をあからむるをいふ、はぢらふさまなり、　面をあかうすれバ鼻の白く見ゆるものゆゑにかくいふ

（頭書）○みかまぎハ御釜木とかけり、大内の詞のよし也、今俗に、たき木の事をまきといふも、釜木のか文字を略たるなるべし

○御戸代小田なるべし

〈図〉○月をめづる、花をめづるハ、愛する也。その詞にめづるなどいふハ、感ずるなり、よく〳〵わかつべし」

（八ウ）

*みわの山　たづねてとへといふ意なり　しかな草　萩をいふ、鹿鳴草也　紅葉鳥　鹿のことをいふ　いたつき　わづらひをいふ、勞の字なり　*きよみがせき　なみだのかゝるそでをいふ　いこふ　やすらふをいふ、憩ノ字又休ノ字　ゆくりなく　不意也、おもひがけなきをいふ　ちおも　乳母をいふ　をんなめ　妾をいふ　いをやすく　寐やすきをいふ　面ぎらひ　子どもの人見しりをいふ　日ぐろむ　日にやけて色の黒くなるをいふ　なめげ　無礼の事、又むらいともいふ　*かはほり　蝙蝠なり、又あふぎの事をいふ

（頭書）○わがいほハ三輪の山もとこひしくバ　とふらひきませ杉たてるかど　此古哥より、たづねとへといふこゝろになれるなるべし、原板に見えたり

○むねハ富士袖ハ清見が関なれや　けふりも波もたゝぬ日ハなし　原板に此古哥を引たり

かはほりの羽にて蚊をうちはらふさまを見て、扇をはじめてつくりいだしたり、ゆゑに扇の異名をかはほりといふ

〈図〉」（九オ）

*はしたかトハ　こひする人をいふ也　*わだつみ　すみよしの浦をいふ　たなばた　まれにあふことをいふ　ちひろのそこ　ふかき海也、恋にしづむたとへにいふ　をみな　女なり　おうな　老女なり、又うばともいふ　さうじ　精進の事　けそう　懸想の字、人に思ひをかくる也、けそうびと、恋人といふにおなじ、けそう文、艶書也　かいま見　物のすきよりのぞき見るをいふ　*みねの白雲　よそに見てすぎがたきをいふ　せきも

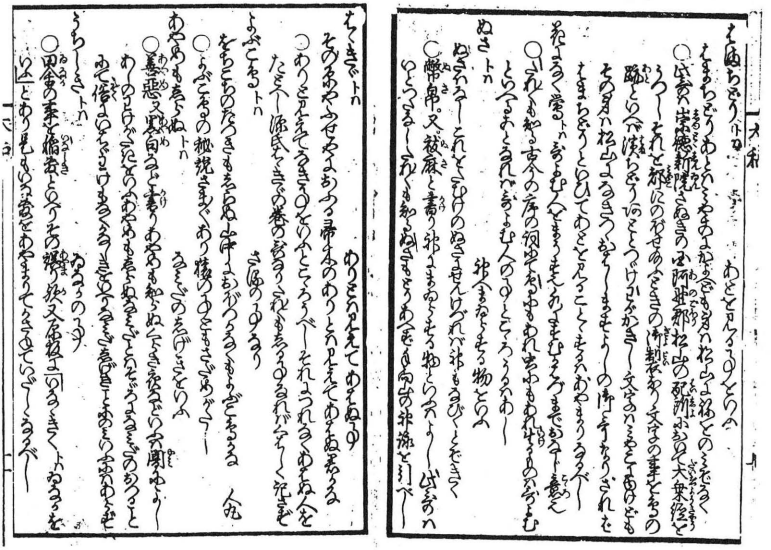

図５　「考訂やまと詞」本文12ウ・13オ

り　関所の番人也　恋にハ人目の関など たとへにいへり　しのだのもり

うらむる事をいふ　ト原板にあり、信田の森ハ葛の名所なれバなり　くずの葉のうら見ること、まへにくはしく見えたり

（頭書）○七月、たままつりに用ひし麻がらの箸を火にたきて、この日はじめて鷹をとやよりいだし、その火にあつる、これを箸鷹といふと古書に見えたり、原板に、此ごとく恋する人をいふとあり、何のゆゑかハ知らず

○わだつみハたゞ大海の事也、又海若とかきてわだつみとよみ、龍神の事とす、原板にすみよしの浦をいふとあるハ、こゝろえがたきことながら、私にあらためず

○よそにのみ見てややみなんかつらきの　たかまの山のみねのしらくも　原板に此哥を引て、よそに見てすぐるをいふとハ、あまりなるあやまりゆゑ、あらたむ」

（九ウ）

ひまをなみ　*暇なきをいふ。なみハ無なり　ぬかつ

ぐ（マヽ）ひたひをしたにつくるをいふ、俗にいふじぎをする事、額突と書り、神にぬかつぐ（マヽ）、仏にぬかづく、拝する事也　からうじて　辛苦してといふ事　石などり　子供の手だま也石なげどりのけをはぶきしなり　ねぢけ人　あしき人也、佞人をいふ　うまびと　よき人也、君子をいふ　ねぎらふ　労を慰むることば俗にたいぎにあつたといふに同じ　ねもごろ　ねんごろ也、懇の字　うはがひ　きものゝうハまへをいふ　しづえ　木のしたえだをいふ　いろはトハ母。いろせトハ兄。いろとトハ弟　みそぢ三十才。よそぢ四十。いそぢ五十。むそぢ六十　なゝそぢ七十。やそのおきな八十翁。もゝとせのうば百歳の老女

（頭書）無をなみといふ事、画上にかきたる、たれ〳〵もしる人丸の哥に、かたをなみといふも、かたの無キといふことなり

「わかのうらにしほがみちてくれバ、干潟が無いから、芦の生てある辺ハ汐がこぬによつて、そこをさしてつるがないてくると解すべし

〈図〉わかの浦に汐みちくれバかたをなみ　芦辺をさして田鶴なきわたる

潟の無を片男波とな思ひあやまりそと貞徳の説也」（一〇オ）

いはとがしはトハ木にあらず、石のかどなり

*まろ木ばし　ふみかへすをいふ　*まがきの石　ふみへだつるをいふ　*つま木　ものにこりたるをいふ　*かたいと　あはぬ事をいふ　とまり舟　つながれたる叉をいふ　ほと〳〵　ほとんど也。殆の字　ふたつの海　生死の事　まに〳〵　随意の字。こゝろまかせ也　かけひの水　たえ〴〵なる事にたとへていふ　あ

けぐれ　夜あけんとして又一トたびくらくなるをいふ　　あけくれ　朝暮なり（くノ字のすみにごりにてわかつべし）　あやめ草　菖蒲をいふ又あやめとばかりもいふ　あやめとハ蛇の異名なり、かの草の根蛇のかたちに似たり、ゆゑにあやめ草といふとぞ

（頭書）○まろ木ばし。まがきの石、原板にならべ出せり

○盛衰記に、わが恋ハ細谷川のまろ木ばし　ふみかへされてぬるゝ袖かな　これによりて、文かへすに踏かへすをかよはせてしるしゝなるべし

籬の石も此たぐひにて、踏へだつるに文へだつるのかよひなるべし、これにも俗につたふる哥のありしにやあらん

○つま木。原板にかくあり、つま木ハたきゞなり、それをとるを、こるといふ、恋などに深く思ひこりたるを、つま木こるによそへていふといふことなるべし

○かた糸をこなたかなたによりかけて　あはずハなにをたまのをにせん」（一〇ウ）

きりたち人　遠くへだゝりし人をいふ　　*はなだのおび　中たゆる事のたとへにいふ　　*しのぶずり　おもひみだるゝたとへにいふ　　つらぬく玉　かずしらぬをいふ　　とひがたみ　とひがたしといふ事なり、かず〳〵におもひおもはずとひがたみ　身をしるあめハふりぞまされる　　しらぎく　うつろひやすきをいふ　　花の色衣　上に同じ　　青柳のいと　みだれやすきをいふ　　宇治の橋姫　まつにむなしきたとへにいふ　　もずの草ぐさ（マヽ）　わが宿をしられじといふにたたふ　　さくら花　あだなることにいふ　　ねやのあふぎ　かたみをいふ

（頭書）○はなだの帯、元板にハうつろひやすきをいふとあり、今八雲御抄の説にしたがふ

はなだ色ハ今の花色也、今あさぎといふ色ハうすはなだなり

むかしあさぎといひしハ、今うすがきといふ色のたぐひ也、黄のうすきもの也、あゐのうすきをあさぎといふハ、あやまりなり、黄をおびてさく花を、あさぎさくらといふにてしるべし

花だのおびハ色いろの帯なり、花のばうしといふも、あゐぞめのばうしをいふ、

○みちのくのしのぶもじずりたれゆゑに　みだれそめにしわれならなくに　此哥よりおもひみだるゝことにいふなるべし」（一一オ）

*すゑの松山波こすトハ　ちぎりのかはる事をいふ　ふなばし　いもせのなかたえたるをいふ　*いなぶね　いなにハあらぬをいふ俗にいふ否でハなき　こしばがき　たちがくれたるをいふ　しかまのかちん　あひそめたるをいふ、しかまとハみちのくの市をまうすなり、うつくしきかちんをそめてうるによつて、まうすなり、○前板にかくあり、しかまの市ハ播磨なり、あやまり欤　あだちがはら　おそろしき事をいふ　ひときの松　たよりなき身をいふかゞみ山　おもかげを見んといふ事　あゆかすな　はたらかすなといふこゝろなり、はしたかのおき餌にせんとかまへたる　をしあゆかすな鼠とるべく

（頭書）○君おきてあだし心をわがもたば　すゑの松山なみハこえなん

最上川のぼれバくだる稲舟の　いなにハあらずこのつきばかり〈図〉

此哥より、いなにハあらぬことにいへり、前板に、いな舟とハしげき思ひをいふとあり、舟ののぼりくだりしげきたとへか、不審」（一一ウ）

*のきばの草　人をわするゝをまうす也　　*三日月　よひにあはんとの事　　*すりばり山　かなハぬ事をいふ
ふじのけぶり　たえぬおもひをいふ　　まつふく風　かしましきをいふ
（頭書）○なにぞこのしのぶにあらでふるさとの　のきばにおふる草の名ぞうき
○なにぞこのしのぶにあらぬ草の名の　人の心やのきばなるらん　元板に此哥を引り
○三日月　ことハきこえつれど、いづれの哥よりいでし詞か知らず
○すりばり山　磨針山の古事なるべし、意ハすこしたがひたれど、おほよそハきこゆべし
以下ハ、前板に見えて、ことに不審の条〻なり
○マルの目安をつけたるハ、翁が増注と見給ふべし

うつゝこゝろトハ　すそはつれたるをいふ
○書あやまり欤、他本に狂乱をいふとあり
かげろふトハ　ゆふぐれに蚊のごとくなく虫なり　かげろふに見しばかりにやはまち鳥　ゆくへもしらぬ恋ハまどはん
○かげろふにくさ〴〵の説あり。野馬。陽炎。とかけるハ、地上よりちら〳〵とたつ氣のことにて、いとゆふのことなり。蜉蝣と書るハぶゆのことなり、又くろきとんぼうをも、かげろふといへり、よしやあしやハしらず、ふるき説なり、蚊のごとくなく虫といふハいぶかし」（一二オ）
はまちどりトハ　あとを見る事をいふ　はまちどりあとハみやこにかよへども　身ハ松山にねをのみぞなく
○此哥ハ、崇徳新院、さぬきの国阿野郡松山の配所において大乗経をうつし、それを都にのぼせ給ふときの御製

なり、文字の事を鳥の跡といへバ、濱ちどりあととつゞけ、わがかきし文字ハみやこにゆけども、その身ハ松山になきつゝおはしますよしの御哥なり、さればはまちどりといひてあとを見ること、するハ、あやまりなるべし

花になく鶯トハ　哥よむ人をまうす也、水にすむかはづまでおなじ意也

○たれも〳〵も知る古今の序の詞にて、鳥にもあれ虫にもあれ、生るものハ哥よむといへることなれバ、哥よむ人の事とこゝろうるハあし

ぬさトハ　神へまゐらする物をいふ、ぬさハなしこれをたむけのぬさにせん　けづれバ神もなびくとぞきく

○幣帛。又祓麻と書り、神にまゐらする物といふハよし、此哥ハいとつたなし、たれも〳〵知るぬさもとりあへず手向山の神詠を引べし」（一二ウ）

はゝきゞトハ　ありとハ見えてあはぬ事　その原やふせやにおふる帚木の　ありとハ見えてあはぬ君かな

○ありと見えてなき事をいふとこゝろうべし、それにつれなくあはぬ人をたとへし、源氏はゝきゞの巻の哥なり、たれ〳〵もしる事なれバ、くはしく記さず

よぶこ鳥トハ　さるの事なり　をちこちのたつきもしらぬ山中に　おぼつかなくもよぶこ鳥かな　人丸

○よぶこ鳥の秘説さま〴〵あり、猿の事ともさだめがたし

あやめもしらぬトハ　なみだのしげきをいふ

○善惡又黒白など書り、あやめも知らぬくらき夜などいふハ、闇によしあしのわけがたきをいふ、あやめもしらぬなみだとハ、そゞろになみだのおつることにて、俗にいはゞ、わけもなくかなしきをいへり、なみだしげきことにのみいふにハあらず

うちしきトハ　ゐなかの事

○田舎の事を稲敷といへり、その誤り欤、又原板に「いなゝきくトハゐなかをいふ」とあり、是もいな敷をあやまりてかさねていだしゝなるべし」（一三オ）

さをしかトハ　たゝずむ事をいふ

○さを鹿のさ文字ハ、發語とて、たゞ何の意もなく冠らせていふなり、早苗、早蕨、早百合の類も、早ハ假字にて、早き事にハあらず。さ。ハ、かの發語にて、たゞ。なへ。わらび。といふことなり、湯のことをさ湯といふにて知るべし、さをしかハ牡鹿なり、たゝずむ事にハあらず源氏にさを鹿もたゝずみぬべきといふ事あり、それをなぞ〳〵にいひしか

ますらをトハ　かりする人をいふ　ますらをが高まど山にせめくれバ　さとにおちくるむさゝびぞこれ

○ますらをハ。健男。速男の字を当しもたま〳〵見ゆれど、おほくハ丈夫と書て、すぐよかにたけきをのこをいふ、かりする人にかぎるべからず、こゝに引たる哥ハ、その丈夫がかりすることをよみたるなり

おにのしこ草トハ　ものわすれぬ事をいふ、此草をうゑて見れバ、人をわすれぬとまうす事なり

○おにのしこ草に兩説あり、一説ハ萱草といふ、此草の異名を忘憂草といひて、此草を見れバ憂ひを忘るゝといへり、それを誤りて、物わすれぬと」（一三ウ）こゝに記しゝ欤、一説ハ紫苑なりといふ、此草につきてくさ〴〵の物がたりあれバ、もしそのうちに、人をわすれぬといふ古事もある欤、詳ならず

原板　貞享元年子三月吉日／再刻天保二年辛卯孟春／大和詞　書林並地本錦繪問丸東都通油町　仙崔堂　鶴屋喜右衛門板」（一四オ）